和歌山市内遺跡発掘調査概報

9

―― 平成８年度 ――

和歌山城跡第７次調査
太田・黒田遺跡第39次調査

9

1997

(1997年4月)
作成

和歌山市教育委員会

序　　文

和歌山県の県庁所在地である和歌山市は、紀ノ川河口に広がる和歌山平野に立地しています。和歌山市内には、旧石器時代から江戸時代に至るおよそ400ケ所にものぼる遺跡が確認されており、さらにその数は年々増加しつつあります。

一方、市内における開発行為も増加しつつあり、遺跡はさまざまな工事等により消滅の危機に晒されています。そのため、当市におきましては、平成7年度より個人による開発行為に対処するため国庫補助金・県費補助金による市内遺跡の発掘調査事業を実施しています。本年度には、近世期の和歌山城の三ノ丸に相当する和歌山城跡と県下の代表的弥生遺跡である太田・黒田遺跡の発掘調査を実施し、貴重な成果を得ることができました。ここに報告する調査概要が、地域の歴史の解明に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御協力を頂きました関係者の皆様に深く感謝いたします。

平成9年3月31日

和歌山市教育委員会
教育長　**坂　口　全　彦**

例　　言

1　本書は、和歌山市教育委員会が平成8年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2　調査対象経費の総額は200万円であり、国1/2、県1/8、市3/8の補助率である。

3　本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	担当者
和歌山城跡第7次調査	和歌山市三番丁2	平成8年11月29日～平成9年3月31日	81㎡	木建正宏
太田・黒田遺跡第39次調査	和歌山市太田461他	平成9年2月14日～平成9年3月31日	60㎡	木建正宏

4　発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長　坂口　全彦
文化振興課長　志岐　忠一
文化財班長　森田　安信(～平成8年7月31日)
　　小松　埴甫(平成8年8月1日～)
学芸員　前田　敬彦
　　益田　雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長　木下　正昭
事務局長　竹尻　圭吾
総務課長　別院　稔
事務主任　酒井　剛(調査庶務担当)
学芸員　木建　正宏(発掘調査担当)

5　本書のうち発掘調査の概要部分については木建正宏はじめ財団法人和歌山市文化体育振興事業団学芸員が担当し、本書の構成については前田敬彦、益田雅司が協議して行った。

本文目次

和歌山城跡第7次発掘調査

1．調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(木建正宏)・・・1
2．位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・2
3．調査内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・4
4．出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・8
5．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・9

太田・黒田遺跡第39次発掘調査

1．調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(木建正宏)・・・11
2．位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・12
3．調査内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・13
4．出土遺物
　(1)弥生時代前期から中期の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・(井馬好英)・・・16
　(2)弥生時代後期の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(木建)・・・・・18
　(3)古墳時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・18
　(4)奈良時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・19
　(5)平安時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・19
　(6)鎌倉時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・19
　(7)室町時代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・19
5．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(〃)・・・・・20

和歌山城跡第７次発掘調査

1．調査に至る経緯と経過

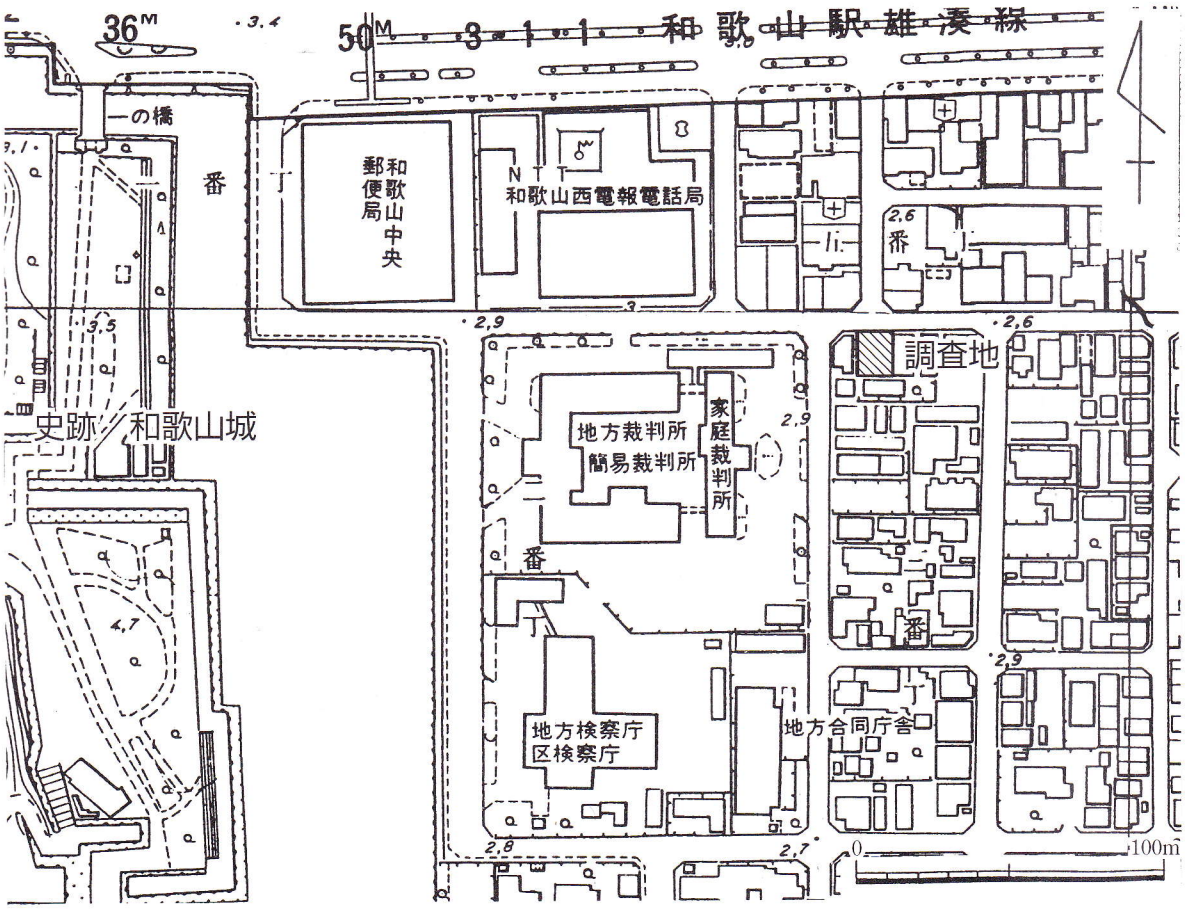
ここに報告する和歌山城跡第7次発掘調査は、和歌山市教育委員会による試掘調査の結果、同教育委員会が緊急発掘調査事業として国庫補助金を得て実施したものである。

調査原因は、和歌山市三番丁2番地において医院の建築が行われることとなり、この建築工事現場が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された和歌山城跡の範囲内であることから、この工事に先立つ発掘調査が必要となり、同教育委員会が試掘調査を行った後、本調査が必要となって実施したものである。

現地における調査は、和歌山市教育委員会から、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が事業を受託して行った。

調査対象地は、和歌山市三番丁2番地であり（第1図）、調査面積は東西6m、南北13.5mの81㎡である。ただしこのうちの東側部分（東西2.5m、南北13.5mの34㎡）については、同教育委員会が事前に試掘調査を行った部分である。

調査経費に関しては、個人住宅として使用する部分と医院として使用する部分の面積比が1対1であるため、総事業費の2分の1を補助金で負担し、残り2分の1を原因者が負担した。現地における調査は、平成8年12月4日から平成8年12月19日までをあてた。



第1図　調査位置図

2．位置と環境

（1）地理的環境

和歌山市がおもな市域をなす、和歌山平野の地形および地質をみると、まず紀ノ川の北岸には、大阪府との府県境をなす和泉山脈が東西に連なる。この山脈は、砂岩・礫岩・頁岩の互層からなる白亜系の和泉層群によって構成されており、その規模は東西約50㎞、南北約10㎞を測る。

これに対して紀ノ川南岸には、竜門山地が断続的に連なる。この竜門山地は三波川変成帯に属しており、緑色角閃石を主体とする結晶片岩（緑色片岩）によって構成されている。

今回の調査対象となった和歌山城跡は、紀ノ川の流域南部に立地している（第2図）。

（2）歴史的環境

旧石器時代　まだ市内での調査例が少なく、全貌を明らかにしえない。しかし紀ノ川北岸には、河口近くの山麓部に鳴滝遺跡が存在する。また、木本地区の西ノ庄地区遺跡からは、ナイフ形石器が出土している。南岸では、総綱谷・頭陀寺遺跡等があり、ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代　近畿地方ではじめて発見された貝塚として著名な鳴神貝塚をはじめ、吉礼貝塚・禰宜貝塚・岡崎遺跡等がある。鳴神貝塚は中期初頭から晩期にかけての貝塚で、1955年の調査では抜歯を行った女性の頭骨が検出された。この頭骨に伴って猿の橈骨でつくられた耳栓も出土している。

弥生時代　弥生時代の著名な遺跡としては、紀ノ川南岸の微高地上に立地する前期から中期にかけての太田・黒田遺跡がある。この遺跡では船橋式の系譜を引く土器と遠賀川系の土器とが同一土坑内から一括出土している。いっぽう紀ノ川北岸では、中期になって宇田森・北田井遺跡等の集落が営まれる。また 後期には丘陵地に滝ケ峰・橘谷等の遺跡が形成され、さらに後期末から古墳時代前期にかけては、府中Ⅳ遺跡などが形成される。

古墳時代　和歌山平野周辺部で本格的な古墳の築造がはじまるのは、現在のところ4世紀末から5世紀初頭にかけてと考えられている。その後5世紀後半から7世紀前半にかけては、岩橋丘陵一帯に約700基を数える古墳が連綿と営み続けられる。

歴史時代　この時期の良好な遺構としては、史跡和歌山城と和歌山城跡、および本願寺別院鷺森御坊跡等がある。和歌山城跡は、史跡和歌山城を中心にその周囲を取り囲む三の丸跡の遺構で、過去6回の調査では、石垣、石敷き遺構などが検出されている。

【参考文献】
『和歌山市史』第1巻「自然・原始・古代・中世」和歌山市史編纂委員会　1991
和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』1996
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報2－平成2（1990）・平成3（1991）年度－』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1994
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報3－平成4（1992）・平成5（1993）年度－』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1996
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報4－平成6（1994）年度－』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1997

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	**太田・黒田遺跡**	**弥生～室町**	16	和田遺跡	弥生～古墳	31	鳴神貝塚	縄文～弥生	46	和田遺跡	弥生
2	太田城跡	安土・桃山	17	川口遺跡	弥生～古墳	32	鳴神Ⅲ遺跡		47	寺内古墳群	古墳
3	国有本遺跡	弥生～古墳	18	直川遺跡	縄文	33	花山古墳群	古墳	48	山東古墳群	古墳
4	楠見遺跡	古墳	19	高井遺跡	縄文	34	栗栖Ⅰ遺跡	古墳	49	吉礼砂羅谷窪跡	古墳～奈良
5	晒山古墳群	古墳	20	府中Ⅳ遺跡	弥生～古墳	35	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	50	吉礼Ⅲ遺跡	弥生
6	雨が谷古墳群	古墳	21	府中Ⅱ遺跡	弥生	36	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳	51	吉礼貝塚	縄文
7	雨が谷遺跡	弥生	22	田屋遺跡	弥生～古墳	37	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳	52	西吉礼遺跡	弥生
8	鳴滝遺跡	古墳	23	西田井遺跡	弥生～中世	38	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	53	東吉礼遺跡	弥生
9	鳴滝古墳群	古墳	24	北田井遺跡	弥生～古墳	39	岩橋千塚古墳群	古墳	54	千石山遺跡	弥生
10	園部Ⅰ遺跡		25	鳴神Ⅵ遺跡	古墳	40	和佐古墳群	古墳	55	馬場遺跡	弥生
11	園部Ⅱ遺跡		26	秋月遺跡	弥生～奈良	41	井辺遺跡	弥生	56	城ヶ森遺跡	弥生
12	大同寺遺跡	奈良	27	津秦遺跡	弥生	42	神前遺跡	弥生	57	三田古墳群	古墳
13	西辻遺跡	弥生	28	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	43	井辺前山古墳群	古墳	58	本願寺跡	中世～
14	法然寺遺跡	弥生	29	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	44	和田古墳群	古墳	59	鷺の森遺跡	弥生～古墳
15	六十谷遺跡	縄文～弥生	30	音浦遺跡	古墳	45	和田岩坪遺跡	弥生～古墳	**60**	**和歌山城跡**	**江戸**

第２図　遺跡分布図

3．調査内容

（1）調査の方法

調査の方法は、まず重機（バックホウ）によって現代の盛土を除去し、その後に人力による調査を行った。また実測・遺物の取り上げとなる地区割については、調査区の北東隅に仮の原点を設け、南側の撹乱部分を除き4mのメッシュを用いて6区に区画した（第3図）。また、堆積層の色調および土質の観察等に際しては、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

以下に報告する遺構等の計測値は、全て調査時における残存状況を示している。

（2）層　序

今回の調査区においては、調査区東壁面の南北断面に最も良く堆積の状況が現われていた（第4図・図版2）。その土色および土質を以下に示す。

ただし、第3･4層は、調査区の一部に堆積している層であり、調査区全面には第1･2･5･7層が堆積していた。

盛　土

第1層　2.5YR4／6　赤褐　粗砂

（昭和20年和歌山大空襲時の焼土）

第2層　N1.5／0　黒　炭層

（昭和20年和歌山大空襲時の炭層）

第3層　10YR5／3　にぶい黄褐

細砂混シルト（近代整地層）

第4層　10Y3／1　オリーブ黒　細砂

（近代整地層）

第5層　2.5Y4／2　暗灰黄シルト混細砂

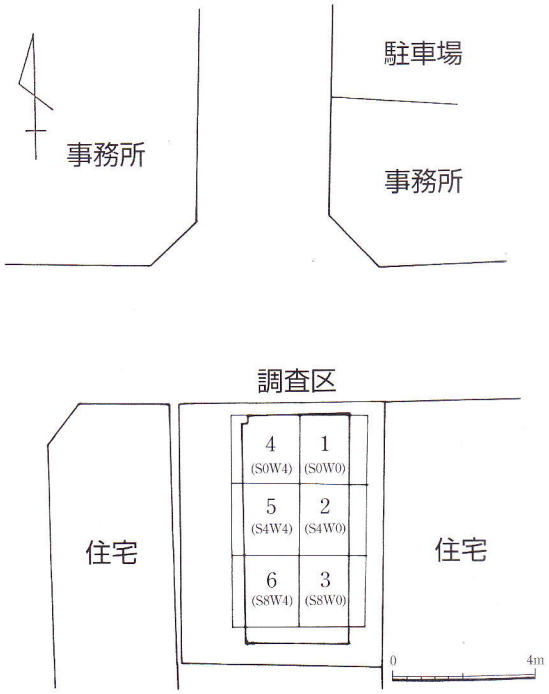
（第1遺構面のベース層）

第6層　10YR5／3　にぶい黄褐

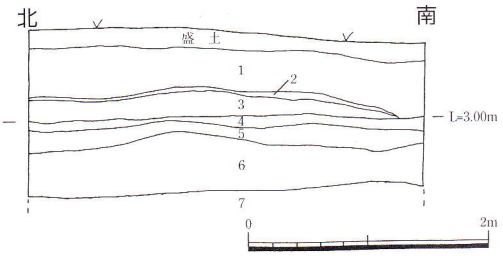
シルト（第2遺構面のベース層。近世の遺物を若干包含する）調査区の西側のみに堆積していた。

第7層　2.5Y4／2　暗灰黄　粗砂

（第2遺構面のベース層・無遺物層）



第3図　地区割図



第4図　基本層序図

（3）検出遺構

今回の調査では、遺構面を2面確認した。但し第1遺構面の遺構群のうち、性格不明の集石遺構（SX－1～4）は、同一面における他の遺構群より検出レベルが約2～5㎝ 高く、石材も熱によって暗赤褐色に変色しているものが若干存在する。

このことから、第1遺構面においては、遺構群に時期差が存在し、SX－1～4は他の遺構群よりも新しく、昭和20年の和歌山大空襲時まで存在していた何らかの施設に伴うものである可能性が考えられる。以下、各遺構面における主要遺構についての概略を報告する。

第1遺構面（第5図、図版1）

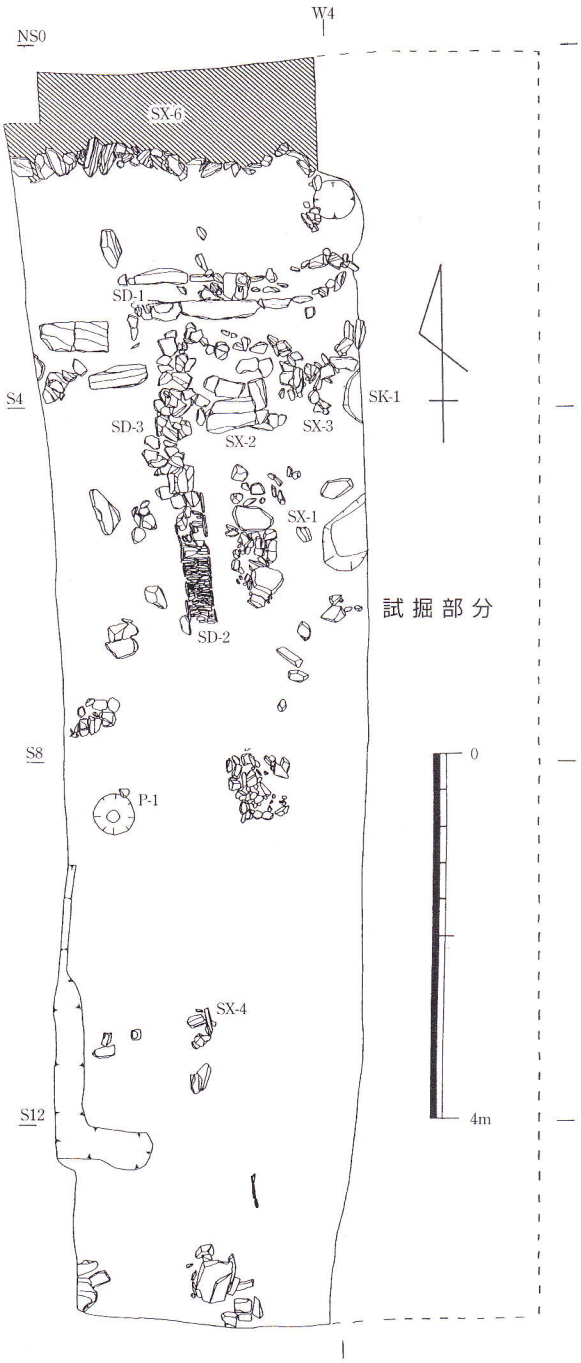
この遺構面を覆っている堆積層は第1・2層である。ただし3層および第4層は、調査区内の一部に堆積していた。

この層は整地層と考えられることから、本来全面に堆積していたものなのか、または戦後になって削平をうけた結果のものなのかは、現時点では不明であると言わざるをえない。

第4層からは「明治三十七年大阪朝日新聞創刊二十五年記念造幣局製」銘の銅製メダルや、幕末の肥前系染付碗の小片等が出土している。

また、SD－2から出土した遺物群の時期は、18世紀末から19世紀後半代に求めることができる。したがってこの遺構面は、18世紀末から明治37年までの間に形成されたと考えられる。ただし、既述のごとくSX－1～4は、6層の上面での検出で、昭和20年の和歌山大空襲時まで存在していた何らかの施設に伴う可能性が考えられる。以下、各遺構について述べる。

SD－1　東西方向の溝である。長さ2.4ｍ、幅20㎝、深さは東端部で18㎝、西端部では20㎝を測る。遺構覆土は、にぶい黄褐色を呈する細砂混シルトである。この溝は非常に丁寧な作りをしている。溝の構築方法を調査成果から復元すると、まず砂岩および緑色片岩の割石を側壁として設置し、その後に建造物の床に用いられるような土間状のものを敷いて溝底部とする。最後に側壁内側に漆喰を塗布して仕上げの化粧を施す。この溝に伴うような蓋石は全く認められなかった。漆喰で化粧していることなどと考え合わせて、当初より開渠であったものと考えられる。この溝からは肥前系染付碗の底部および土師器小片が十数点出土した。



第5図　第1遺構面遺構平面図

SD－2　南北方向の溝である。残存長は1.4ｍで、幅は30㎝を測る。側壁は平瓦を立て並べる。この側壁内側には、東西方向すなわち側壁とは直交方向に平瓦を立て並べ、溝の内部を充填する（図版3）。

溝の中からはコンテナ1箱分の丸瓦・平瓦のほかに、肥前系染付碗、ホウラク、唐津焼鉢など、18世紀末から19世紀後半代の遺物が出土した。この溝はその形態から、建物の軒先下にあたる雨落ち溝と考えられる。

SD－3　SD－2の北側で検出した逆L字形の石列である。暗渠排水のための溝と考えられる。南北長1.8ｍ、東西長2.0ｍで、幅は南北部分が40㎝、東西部分は約20㎝を測る。

南北部分は砂岩・緑色片岩を2ないし3列並べている様相を呈するが、東西部分は緑色片岩を1～2列並べている状況で検出した。

この遺構の南端部分は、SD－2の北端を破壊しており、この遺構の方が新しく設けられたことがわかる。また、東端部分は若干蛇行しながらも、教育委員会の試掘調査部分西端にまで至っている。この遺構からの出土遺物はない。

P－1　直径40㎝、深さは36.5㎝を測るピットである。遺構覆土はオリーブ黒色を呈する細砂である。この覆土は、基本層序の第4層に類似する。

SK－1　調査区の東端で検出した土坑である。この遺構の東部は試掘時に掘削されている。残存部分の規模は、東西20㎝以上、南北は60㎝を測る。深さは最深部で19㎝である。覆土は焼土で、暗赤褐色（5YR3／2）の細砂である。出土遺物はない。

SX－1　南北1.4ｍ、東西40㎝の範囲にまとまる礫群である。礎石に伴う根固めの施設（根石）の可能性が考えられる。多くは一辺10㎝程度の拳大の緑色片岩で構成されているが、2点のみ一辺が約40㎝を測る規模の砂岩が存在する。この砂岩が礎石である可能性も考えられる。出土遺物はない。

SX－2　南北80㎝、東西80㎝の範囲内にまとまっている礫群である。この遺構もSX－1と同様に根石の可能性がある。出土遺物はない。

SX－3　SX－2の東側で検出したものである。SX－1・2同様根石の可能性が考えられる。検出範囲は南北40㎝、東西50㎝であるが、その西側部分は調査区外に延びる。礫の大きさは、拳大から人頭大の規模である。出土遺物はない。

SX－4　緑色片岩の板石を矩形に組み合わせた遺構である。一辺は30㎝を測る。ただし、西側の石材は確認できなかった。出土遺物はない。

SX－6　調査区北端部で東西方向に検出した。規模は東西3.5ｍ以上、南北1ｍ以上を測る。この遺構を石垣のウラゴメと考えると、石垣は東西方向で、その正面は調査区のさらに北側に存在すると推定できる。そうすると後述するように、安政2（1855）年の和歌山城下町図に描かれている屋敷地の境界に相当する石垣の状況と一致する。

第２遺構面（第６図、図版３・４）

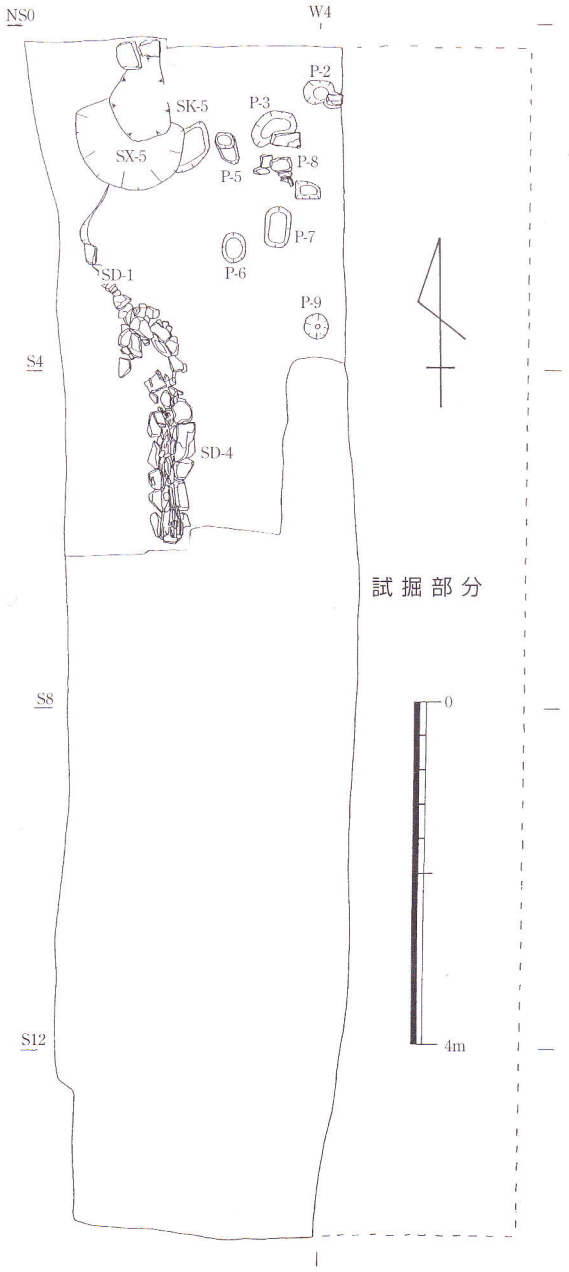
第２遺構面に関しては、教育委員会との協議の結果、遺構の残存が良好である調査区の北西部のみの調査とした。この遺構面では、土坑１基（SK－5）、ピット12基（P－2～13）、溝１条（SD－4）、不明遺構１基（SX－5）を検出した。

SK－5　東西幅60㎝、深さは最深部で12.5㎝の土坑である。北半は上記SX－5と重複しており、この土坑の方が古い。遺構の覆土は、オリーブ黒色（5Y3／1）を呈する粘土混じりの細砂である。この土坑内からは、コンテナ約３分の１箱程度の遺物が出土した。その中には平瓦・丸瓦のほかに鉄釉の茶器、近在窯系の小碗、ホウラク、など18世紀後半代に属する遺物群が出土している。

P－2～9　この遺構面で検出できたピット８基（P－2～9）は、いずれも直径ないし一辺が20～40㎝を測り、深さは5～15㎝を測る。遺構の覆土はほぼ共通し、暗灰黄色を呈するシルトまたは細砂で、これは基本層序の第５層に類似する。これらピット群からの出土遺物はない。

SD－4　南北方向の溝である。幅は残存の良好な部分で50㎝、長さは2.2mを測る。溝の両側面には人頭大や、長辺40㎝、短辺20㎝を測る規模の長方形の緑色片岩を据える。溝内部には、南北方向に平瓦を２ないし３列並べ充填する。このことから、この溝は暗渠として機能していたと推定できる。

SX－5　直径1.2ｍ、深さ１ｍ以上と推定できる。東半部は現代の撹乱によって破壊されている。遺構覆土は灰オリーブ色（7.5Y6／2）を呈する細砂混じりの粘土であり、近世の平瓦、肥前系染付の小片が出土している。この遺構は埋桶が埋置されていた跡の可能性がある。



第６図　第２遺構面遺構平面図

4．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、大半が近世から近代にかけての平瓦と、日常生活容器の小破片群であるが、そのなかでも特に注目すべきものにSK－5から一括出土した遺物がある。以下各遺物について述べる（第7図）。

1は、近在窯系と思われる碗である。口径8.8㎝、底径3.2㎝で器高は5.5㎝を測る。焼成は良好で、胎土は密である。外面には暗茶褐色を呈する植物の文様が描かれている。高台部分を除く内外面前域に透明釉が施されている。高台部分は無釉である。色調は、内外面および断面、高台部分ともに明灰白色を呈する。SK－5から出土した。

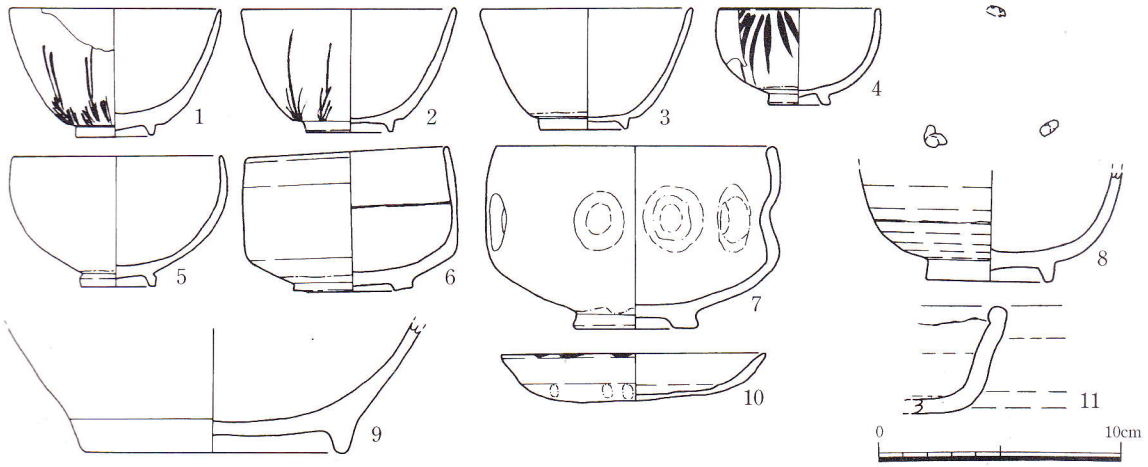
2も近在窯系と思われる碗である。口径8.5㎝、底径3.6㎝で器高は5.0㎝を測る。焼成は良好で、胎土は密である。5と同じく外面には、暗茶褐色を呈する植物の文様が描かれている。また高台部分を除く内外面全域には透明釉が施されている。高台部分は無釉である。色調は内外面が淡灰黄色で断面および高台部分は淡灰白色を呈する。SK－5から出土した。

3も近在窯系と思われる碗である。口径8.5㎝、底径3.2㎝、器高は5.0㎝を測る。焼成は良好で、胎土は密である。5・6とは異なり、この碗は無文である。釉は、高台部分を除く内外面全域に透明釉が施されている。高台部分は無釉である。色調は、内外面および断面、高台部分ともに淡灰白色を呈する。SK－5から出土した。

4は、陶器の碗である。近在窯系と思われる。口径6.5㎝、底径2.6㎝、器高は4.0㎝を測る。外面には暗緑色の笹の葉と思われる文様が描かれている。器壁の内面全域および高台部分を除く外面には透明釉が施されている。高台部分は無釉である。色調は、内外面が淡灰白色で素地は淡灰黄色を呈する。SK－5から出土した。

5も近在窯系と思われる碗である。口径8.6㎝、底径3.0㎝で器高は5.4㎝を測る。焼成は良好で、胎土は密である。3と同じく無文の碗である。釉は、高台部分を除く内外面全域には透明釉が施されている。高台部分は無釉である。色調は、内外面が淡灰緑色で、高台部分は淡灰白色を呈する。SK－5から出土した。

6は、近在窯系の筒型碗である。口径8.3㎝で器高は5.7㎝を測る。胎土は密で焼成は良好である。内面に染付による圏線が1条描かれている。色調は、全体的に緑灰色で、染め付けは暗緑色を呈する。高台部分は素地のままで、淡灰褐色を呈する。2層から出土した。



第７図　遺物実測図

7は瀬戸の沓茶碗である。SK－5から出土した。口径11.5㎝、底径5.1㎝、器高は7.6㎝を測る。焼成は良好で、胎土は密である。形態の特徴として、体部外面に7ヶ所以上の指頭圧痕が不規則に施されている。色調は、高台部分を除く内外面前域に暗茶褐色の釉を施す。ただし、口縁部は、やや釉が薄くなっており、暗茶黄色を呈する。高台部分および断面は、素地のままで、灰白色を呈する。この碗は、その形態から、茶器として用いられたものと推定できる。

8は、瀬戸焼の碗である。いわゆる黄瀬戸である。底径5.3㎝で残存高は4.6㎝を測る。胎土は密であり、焼成はやや悪い状態である。色調は淡緑灰色を呈するが、高台部分は素地土のままで、乳褐色を呈する。SK－5から出土した。

9は、白磁の底部である。SK－5から出土した。残存高は5.1㎝を測る。色調は、外面が淡乳白色で、内面は淡灰白色を呈する。

10は土師器の灯明皿である。口径11㎝で器高は1.9㎝を測る。胎土はやや密で焼成は良好である。口縁端部には煤が付着している。色調は全体的に明赤褐色を呈する。SK－3から出土した。

11は、ホウラクである。残存高は4.4㎝を測る。製作の技法としては、口縁端部において粘土を丸めこんだ後にナデ調整を施している。全体の調整は、外面にケズリを施した後ナデを施す。内面はナデ調整を施す。色調は、外面が暗灰黒色を呈する。また内面は暗灰褐色を呈する。SK－6から出土した。

これら遺物群のうち、SK－5から一括出土したものは、1・2・3・4・5・7・8で、概ね18世紀後半代にその年代を求めることができる。また、この他に第2層直下からは弥生時代のものと考えられる石錘も出土している。

5．まとめ

最後に、今回の調査で検出した遺構群の時期について再び簡単にまとめておきたい。

第1遺構面の場合、この遺構面を覆っている堆積層は主に第1・2層である。第3・4層は調査区の東側一部にのみ堆積が残存していたが、この層からは「明治三十七年大阪朝日新聞創刊二十五年記念造幣局製」銘の銅製メダルや幕末の染付碗小片等が出土している。

またSD－2から出土した遺物群の時期は18世紀末から19世紀後半に求めることができる。よってこの遺構面は18世紀末から明治37年までの間に形成されたと考えることができる。

さらに、SK－5からの出土遺物群の時期は、18世紀後半代に求めることができる。以上のことから今回の調査で検出した遺構面は全て徳川期以降に形成されたものであるといえる。

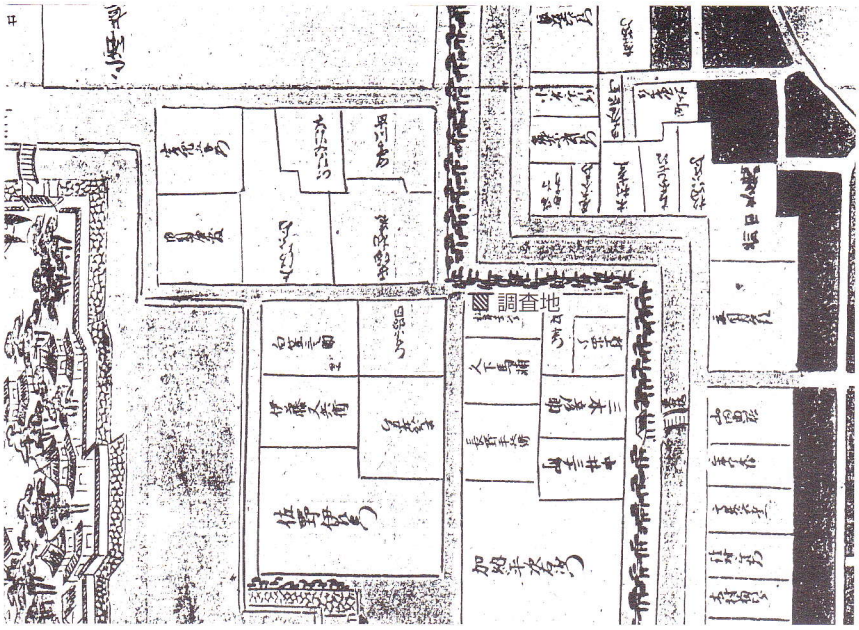
さて、調査地の幕末当時の地目は武家屋敷とされており、安政2（1855）年の和歌山城下町図を参照すると、今回の調査地は松本幸次郎の屋敷内の一角であったと推定できる（第8図）。

さらに詳細に観察すれば、この屋敷は立地や松本幸次郎という文字の方向等から、西側が正面であった可能性が高い。

城下町図によると、当時屋敷地の北側には東西方向の道を隔てて堀が存在し、道と堀との間は松並木が表現されている。屋敷の西正面には南北方向の比較的広い道路が存在する。したがってこの屋敷の北西角は交差点である。

発掘調査の成果では、調査区の北端部で東西方向の石垣のウラゴメと考えられる礫群を検出した。これが石垣のウラゴメであると仮定するならば、この石垣は北側の道路と屋敷地とを区画するためのものであったと考えられる。

そうすると、調査区の北側には外堀が存在し、その外堀の南側には松並木があり、さらに道路を隔てて石垣によって境界を明示した松本幸次郎の屋敷が存在していたという、歴史的景観を復元することができるのである。



第８図　和歌山城下町図
（部分複写・上が北　原典は和中光次氏蔵）に加筆して作成

【参考文献】
和歌山城下町図　紙本着色　野際葵真画　安政２（1855）年　和中光次氏蔵
三尾 功 他「和歌山城の復元模型製作について」『和歌山市立博物館 研究紀要５』1990
『和歌山市史』第２巻「近世」和歌山市史編纂委員会　1991

太田・黒田遺跡第39次発掘調査

1．調査に至る経緯と経過

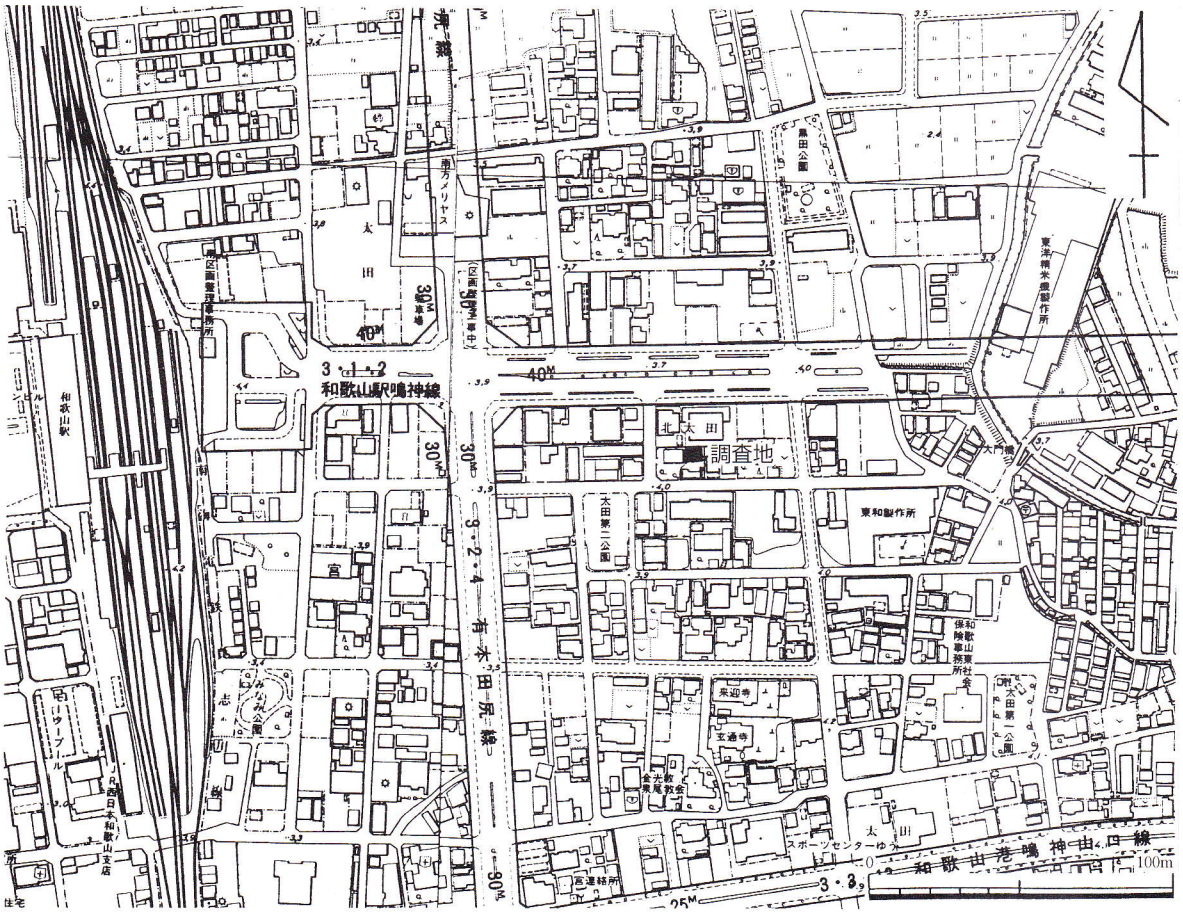
太田・黒田遺跡第39次発掘調査は、個人住宅の建築に伴って行った調査で、和歌山市教育委員会が緊急発掘調査事業として国庫補助金を得、現地における調査を同教育委員会から財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託して実施したものである。

調査の原因は、和歌山市太田461番地他において個人住宅の建築が行われることとなり、この建築工事現場が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された太田・黒田遺跡の範囲内であることから、工事に先立つ発掘調査が必要となり、これを実施したものである。

調査対象地は、和歌山市太田461番地他であり（第1図）、調査面積は東西10m、南北6mの60㎡である。

調査の経費に関しては、その全額が補助金対象であった。また現地における調査は、平成9年2月17日から同年3月11日までをあてた。

なお、今回の調査地は、1968（昭和43）年から1971（昭和46）年に和歌山市教育委員会から委託を受けた太田黒田遺跡調査団が行った発掘調査地の一角である。よって今回の調査の目的は、上記調査時における未掘部分（主として当時、堆積層観察の目的で残されたセクションベルト）の調査である。



第1図　調査位置図

2．位置と環境

地理的環境および和歌山平野全体における主要遺跡の概略は、和歌山城跡第7次発掘調査で記述しているので（遺跡地図は、和歌山城跡第7次発掘調査の項参照）、ここでは太田・黒田遺跡の最近の主な調査成果の概略と、関連遺跡について記述する。

太田・黒田遺跡は、紀ノ川南岸の微高地上に立地する、弥生時代前期から中期にかけてを中心とした集落遺跡と考えられている。1987年に和歌山市教育委員会によって行われた第19次発掘調査では、弥生および古墳時代のピット、土坑、溝など多数の遺構が検出されており、また中世末期の遺構では、東西方向の大型濠状遺構も検出されている。この濠状遺構はそれまでの調査成果から、東西に130m以上の長さをもっていることがわかっている。

その後1988年に、和歌山市教育委員会によって行われた第21次発掘調査では、弥生時代の溝や土坑のほかに小型の土器棺や土壙墓も検出された。また、奈良時代前期の大型の井戸1基も検出され、須恵器数個体のほかに斎串1点が出土した。

同年、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行った第22次発掘調査では、弥生時代中期の竪穴住居跡3棟などが検出されている。この住居跡は、太田・黒田遺跡の範囲内において、今までに最も西側で検出された中期の住居跡である。

1994年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行った第24次発掘調査では、特殊な遺構として、中期の壺棺1基が検出された。

1995年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行った第26次発掘調査では、弥生時代前期後葉から中期前葉までの水田跡や土坑、大溝、中期中葉の水田跡、中期後葉の溝、古墳時代前期の溝のほかに、中世末期の大溝も検出された。このうち前期後葉の大溝最下層からは、木製の直柄広鍬が1点出土した。

弥生時代も中期を迎えると、紀ノ川南岸における太田・黒田遺跡のほか、北岸地域には宇田森・北田井遺跡等の集落が営まれる。また 後期には丘陵地に滝ケ峰・橘谷等の遺跡が形成され、さらに後期末から古墳時代前期にかけては、府中Ⅳ遺跡などが形成される。

この府中Ⅳ遺跡は、平成6年に新しく発見された集落遺跡で、同年12月に第1次発掘調査が行われた結果、平面が円形の竪穴住居7棟および平面が方形の竪穴住居9棟の合計16棟の竪穴住居が確認された。また平成8年に行われた第2次発掘調査では、平面円形の竪穴住居が2棟、方形が5棟の7棟の竪穴住居のほかに、4棟の掘立柱建物などが検出された。出土遺物としては、弥生から古墳時代にかけての土器・石器類のほかに奈良時代の磚なども出土している。

【参考文献】
『和歌山県史』「考古資料」和歌山県史編纂委員会　1983
『和歌山市史』第1巻「自然・原始・古代・中世」和歌山市史編纂委員会　1991
『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』　財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1995
和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』1996
『府中Ⅳ遺跡第2次発掘調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1996

3．調査内容

（1）調査の方法

調査の方法は、まず重機（バックホウ）によって現代の盛土を除去し、その後に人力による遺物包含層の掘削・遺構の掘削・写真撮影・測量作業等の調査を行った。

なお、太田黒田遺跡調査団による調査終了後に埋め戻された土についても、各セクションベルトごとに区割りし、そこに包含されている遺物を取り上げた（第2図・図版6）。

調査区の地区割り、出土遺物の取り上げ、および遺構の実測時における基準には国土座標軸を用いた。

また、堆積層の色調および土質の観察等に際しては、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

（2）層　　序

今回の調査区においては、北側壁面の東西断面に最も良く堆積の状況が現われていたため、これを基本層序と定め、調査を進行した（第4図）。その土色および土質を以下に示す。

盛　土

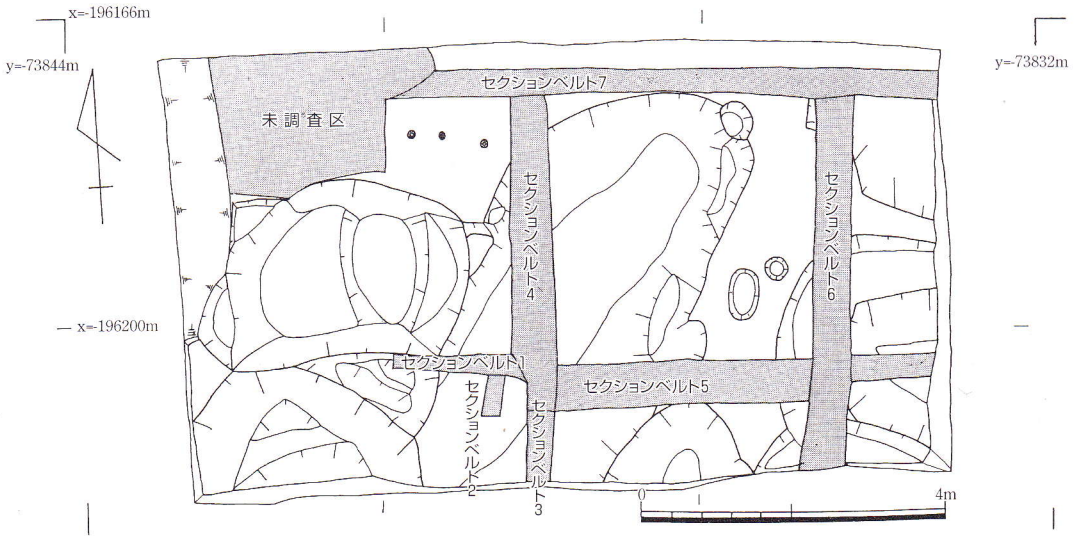
第1層　5Y5／1　灰　粗砂（旧耕土）近代から現代の堆積層

第2層　5Y5／4　オリーブ　細砂（マンガン粒を多く含む）近世の堆積層

第3層　2.5Y6／4　にぶい黄　シルト混粘土（ベース土）弥生時代中期以前の堆積層

（3）検出遺構

今回の調査で検出した遺構面は、上記基本層序の第3層をベースとしており、太田黒田遺跡調査団調査時の未掘部分において近世の土坑2基（SK－1・2）、弥生時代中期（畿内第II様式）の土坑1基（SK－3）の遺構群を検出した。また太田黒田遺跡調査団の調査時（以下過去の調査と記述）に検出され、調査後埋め戻された遺構についても、再度調査を行い確認した（第3・4図、図版7）。以下、各遺構について述べる。



第2図　埋土処理状況図

ＳＫ－１　東西45㎝、南北70㎝、深さは最深部で1.5ｍを測る土坑である。遺構覆土は灰色（5Ｙ4／1）を呈する細砂で、炭を多く含んでいる。出土遺物には近世の平瓦、肥前系染付碗などの11点がある。

SK－2　東西1.5ｍ、深さは最深部で41㎝を測る土坑である（図版8）。近世の堆積層（第2層）の上面から掘り込まれている。この土坑の北側は調査区外に存在し、また南側は過去の調査時に掘削されている。遺構覆土は2層に分層できる。上層は、黒褐色（2.5Ｙ3／1）を呈する細砂で、炭を多く含む。また下層は黄褐色（2.5Ｙ5／4）を呈する細砂混じりの粘土で、色調はベース土に類似している。遺物は上層から奈良時代の土師器杯が出土している。

SK－3　東西1.5m、南北1.1m以上を測る土坑である。南側はSK－5と重複し、このSK－3のほうが古い。その深さは最深部で50㎝を測り、遺構覆土はオリーブ褐色（2.5Ｙ4／6）の細砂である。遺物は全て第1層からの出土で、弥生時代中期（第II様式期）の壺、甕等がある。

以上が今回の調査で新たに検出した遺構である。次に過去の調査で検出済みの遺構についても、再確認する意味で以下に記述する。

なお、遺構番号について、過去の調査時には主要な遺構に遺構番号を付して発表されているが、今回は新たに検出した全ての遺構について番号を付した。従って遺構番号が今回の調査と過去の調査とで相違するものは、必ず以下の本文中にその旨を記す。

SK－4　調査区の南西隅で検出した土坑である。過去の調査においてはSK001の遺構番号が与えられている。その規模は、1辺2.5mである。過去の調査成果から、方形の土坑と確認されている。この土坑の北端部はSK－5と重複し、このSK－4のほうが古い。また、東端部はSD－1と重複し、SD－1のほうが古い。この土坑の深さは、最深部で1.3mを測る。覆土は過去の調査によって完掘されているため、不明である。

SK－5　東西3.5ｍ、南北2.4ｍを測る土坑である。やや東西に長い円形の土坑である。深さは最深部で1.4ｍを測る。この土坑の覆土は過去の調査によって完掘されているために不明である。

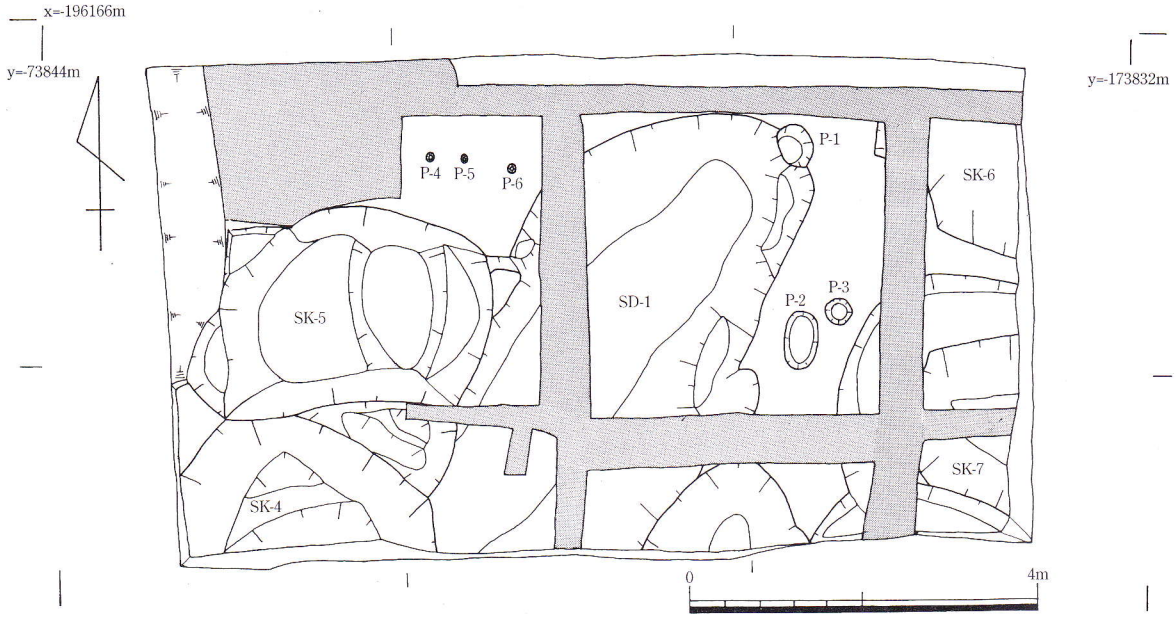
SK－6　調査区北東隅で検出した土坑である。東西1ｍから1.5ｍ以上、南北は1.9ｍ以上を測る。この遺構の北部および東部は調査区外にのびる。また深さは1ｍ以上を測る。遺構の覆土は2層に分層できる。上層はオリーブ黒色（5Ｙ3／1）を呈する細砂混じりの粘土で、炭を多く含む。下層はオリーブ黄色（5Ｙ6／4）を呈する細砂混じりの粘土である。この遺構からの出土遺物はない。

SK－7　調査区の南東隅で検出した土坑である。東西1.8ｍ以上、南北3.0ｍ以上を測る、円形の土坑と考えられる。遺構の東部および南部は、調査区外に存在する。深さは最深部で1.3ｍを測る。覆土は、オリーブ黄色（5Ｙ6／4）を呈する細砂である。出土遺物はない。

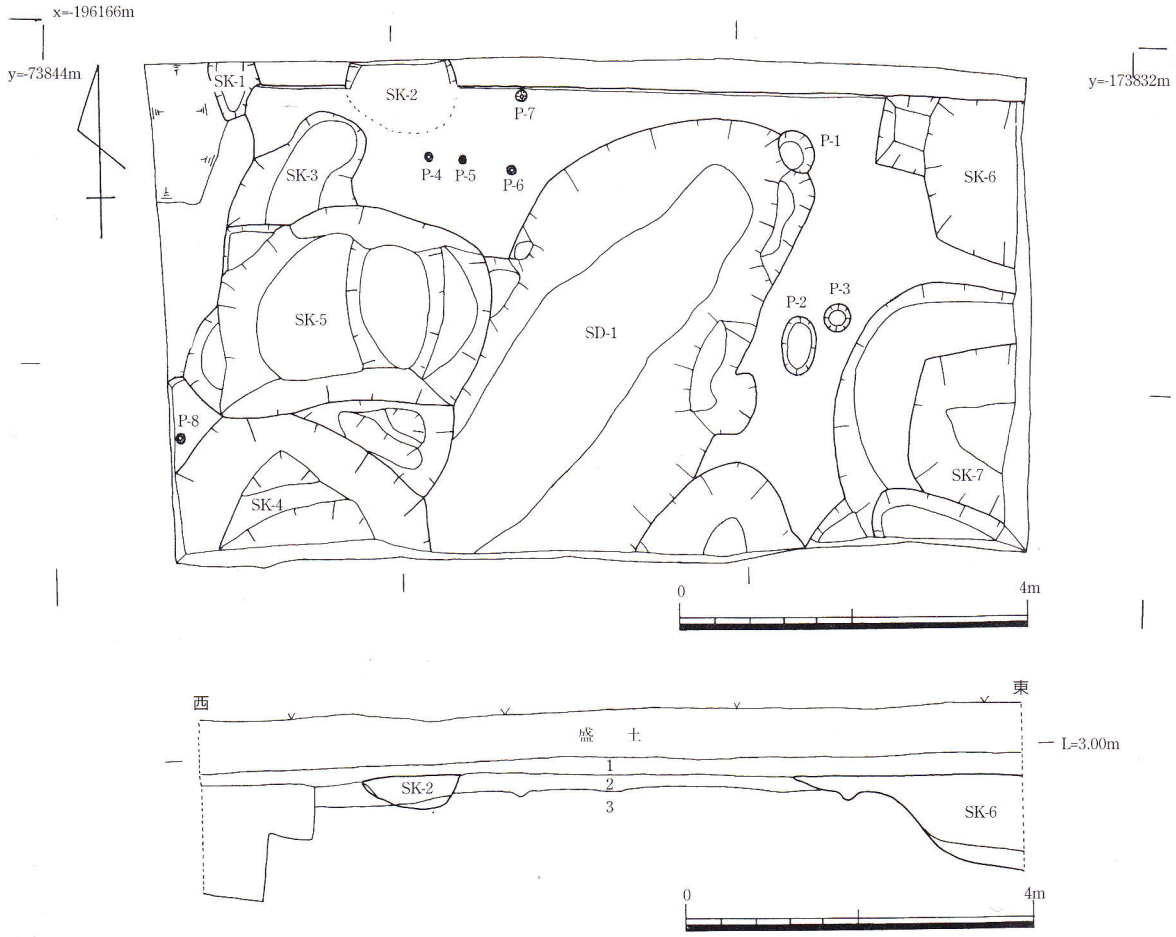
SD－1　調査区の中央部を北東から南西に向かって横切る溝である。規模は、最大幅が3.2ｍで長さは6m以上を測る。また深さは、北東端が最も浅くて22㎝を測り、最も深い南西端では82㎝を測る。この遺構の南西部は調査区外にのびる。いっぽう北端部は擂鉢状を呈して終わる。

覆土は暗オリーブ色（7.5Y5／3）を呈するシルト混じりの細砂で、わずかに炭を含む。

P－1　直径50㎝、深さ16㎝を測るピットである。南西部はSD－1と重複しており、この遺構のほうが新しい。覆土は過去の調査によって完掘されているため、不明である。



第３図　前調査時遺構平面図



第４図　遺構平面図および北壁土層断面図

P－2　東西40㎝、南北60㎝の南北に長いピットである。深さは16㎝を測る。覆土は過去の調査によって完掘されているため、不明である。

P－3　直径30㎝で深さは27㎝を測るピットである。覆土は過去の調査によって完掘されているため、不明である。

P－4・5・6・8　いずれも小規模なピットで、直径は約10㎝、深さは4～8㎝を測る。杭跡の可能性も考えられる。覆土は過去の調査によって完掘されているため、不明である。

P－7　調査区の北端で検出したピットである。規模は、直径10㎝、深さは16㎝を測る。覆土は、オリーブ黒色（5Y3/1）を呈する細砂である。出土遺物はない。

4．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、大半が埋戻し土内からの出土であるが、遺構内出土遺物のうち、特に注目すべきものにSK－3から出土した弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式併行期）に属する土器群がある。以下、弥生時代の遺物について先に記述し、その後に古墳時代以降の遺物について述べる。

(1)弥生時代前期から中期の遺物

SK-3出土遺物(第5図、1～7)　1は、広口壺の口縁部で復元口径25.4㎝を測るものである。口縁外端面には一条のヘラ描き沈線文を施したのち刻み目を入れている。調整は、まず内外面ともハケ調整を行い、その後ヘラミガキ調整を施し、指ナデによって仕上げている。3・4は、壺の肩部である。3は櫛描直線文と櫛描波状文によりに加飾している。4は櫛描直線文を施したのち櫛描による弧を描き擬似流水文に仕上げている。2は、いわゆる紀伊型甕である。体部外面はヘラケズリ調整と指頭による強いナデ調整によって明瞭に段をなす。またくびれ部には成形時のタタキ調整がわずかに残る。体部下半のヘラケズリ調整は指ナデによって消されている。底部(5～7)では、壺とみられるもの(6)と甕とみられるもの(5・7)がある。6には外面に丁寧なヘラミガキ調整、内面にハケ調整がそれぞれ施されている。5・7は上げ底状のもので、外面にハケ調整を施すもの(5)と紀伊型の特徴であるヘラケズリ調整を施すものがある。

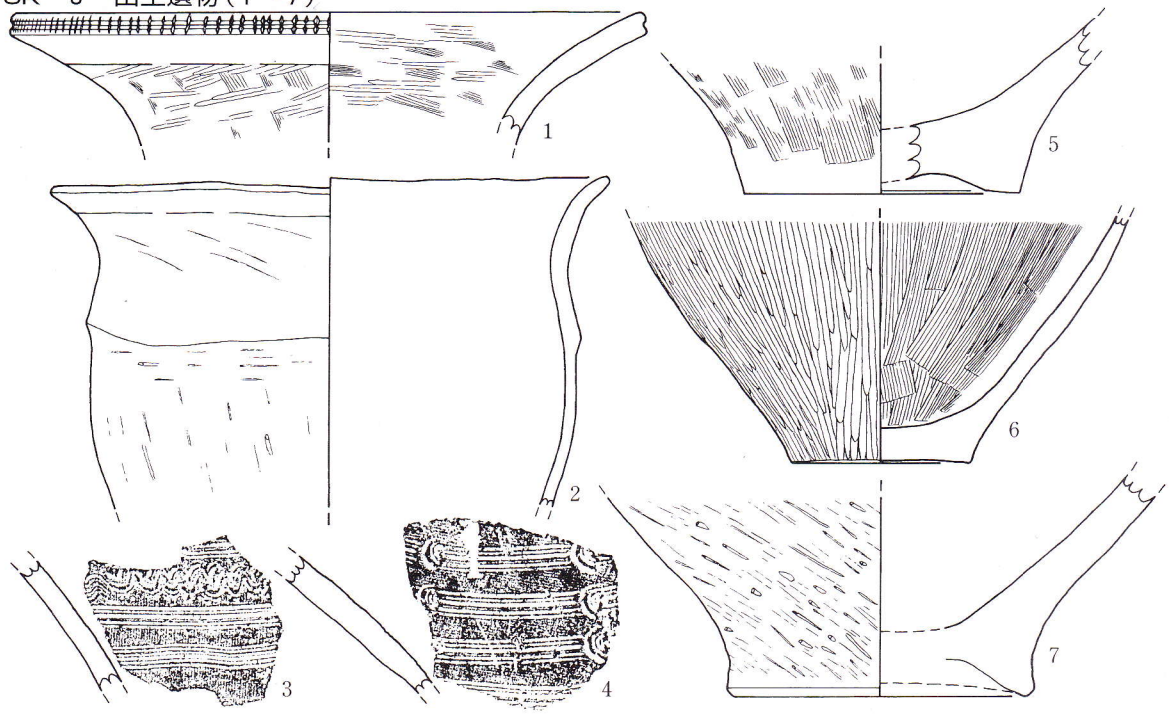
これらの遺物は、胎土中に結晶片岩や石英を含むことから在地系の土器であることが明らかである。また、なかには混和材と考えられる丸い砂粒を多く含むもの(3・4)や角張った砂礫を多く含むもの(5)がある。

この一括資料から同遺構の時期は畿内第Ⅱ様式の古段階に位置づけられる。

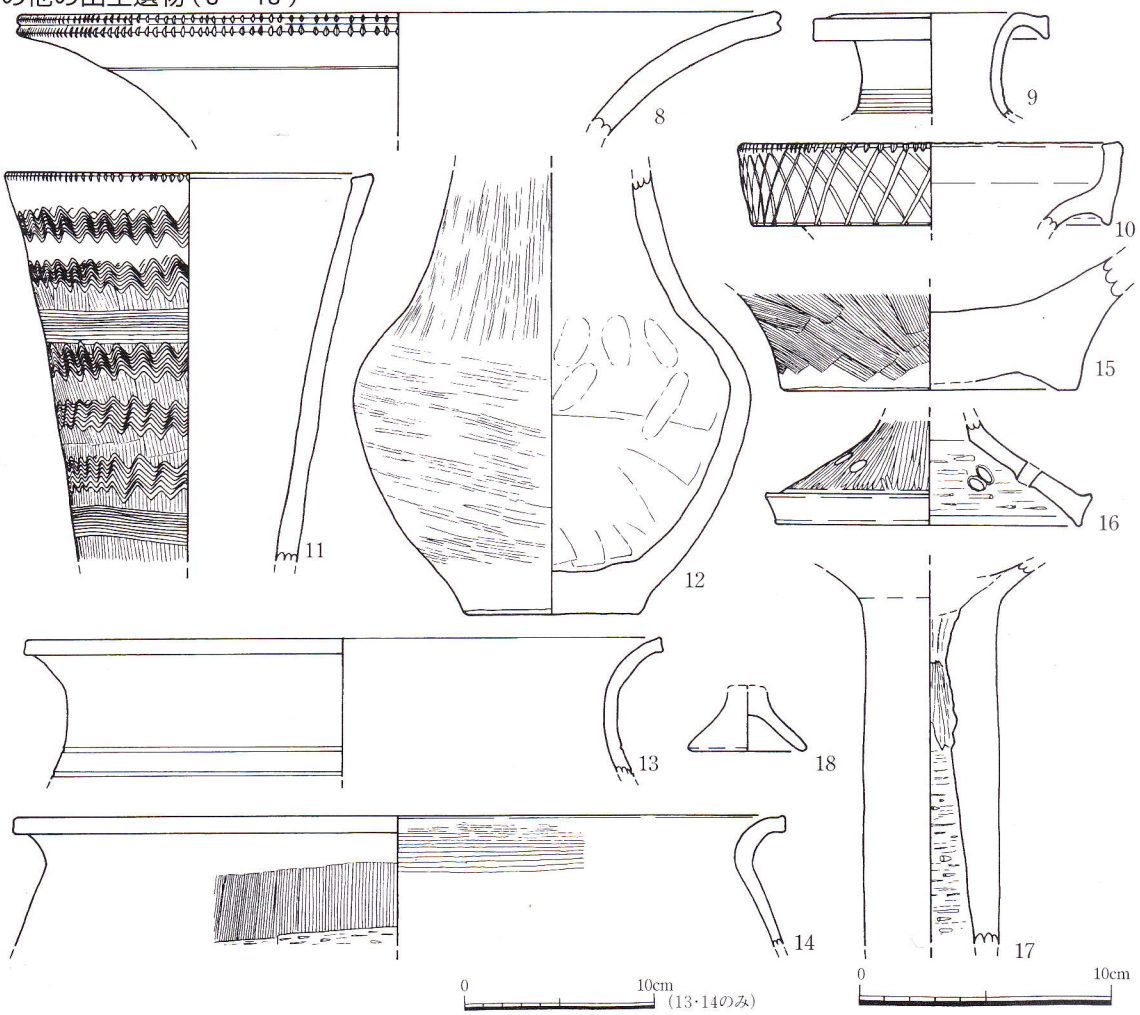
その他の出土遺物(第5図、8～18)　SK－3以外では江戸時代の堆積層である1・2層および前調査の埋土に含まれていたものである。

8は、1と同様口縁外端面に一条のヘラ描沈線文ののち刻み目を施したもので、さらに外面に一条のヘラ描沈線を施したものである。9は、口縁部が大きく下方に屈曲して肥厚する広口細頸壺である。10は、段状口縁壺である。口縁部外端部には刻み目施し、幅広の外端面にはヘラ描斜格文を施している。11は、直口壺の口縁部である。これも口縁端部外面に刻み目を施している。外面の調整は、タテ方向のハケ調整ののちに多条の櫛描波状文と櫛描直線文によって加飾している。12は、茶褐色の色調を呈する壺の胴部で肉厚な器壁をもつ。外面調整はヘラミガキ調整ののちに指ナデによって一部を消している。この土器の胎土

SK－3　出土遺物（1～7）



その他の出土遺物（8～18）

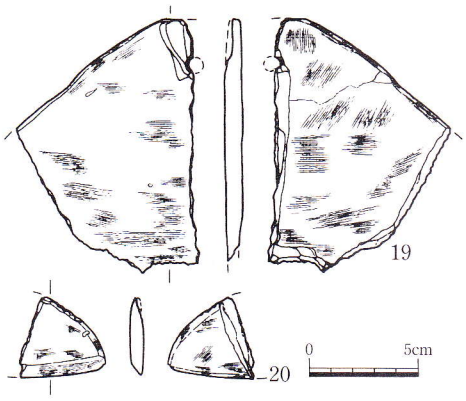


第5図　遺物実測図1

には角閃石が多量に含まれており、生駒山西麓産であることがわかる。13・14は甕の口縁部である。13はいわゆる遠賀川系の甕であり、くびれ部の下外面に一本を単位とする二条のヘラ描沈線文が施されている。14は復元口径41.6㎝を測る大型のもので頸部下の外面にタテ方向のハケ調整を行ったのち横方向のヘラケズリ調整を施している。また頸部内面にはヨコ方向のハケ調整が観察できる特殊なタイプのものである。15は、前述の5と同じ形態の底部である。16・17は、ともに高杯の脚部である。16は、端部を上下に肥厚させたもので外面に丁寧なヘラミガキ調整を施し、また内面はヘラケズリ調整による。円形透しは、2個を単位とし五方に穿たれている。17は、ほぼ直立する脚中央部であり、外面調整は剥離によって失われているものの内面にはヘラケズリ調整が顕著に残る。18は、復元径4.5㎝を測るミニチュアの蓋である。

これらの遺物では、12を除くすべての胎土中に結晶片岩や石英が含まれ、在地系の土器とみられる。また赤色軟質粒を多く含むもの(17・18)や混和材と考えられる丸い砂粒を多く含むもの(8・13)などがある。色調は、赤褐色を呈するものがほどんどをしめる。

石庖丁(第6図、19・20)　今回の調査において出土した石器は、石庖丁2点のみである。これらは、すべて半月形をした磨製のもので、緑色片岩製である。19は、刃の部分がすべて欠失しているが、大型石庖丁の破片である。



第6図　遺物実測図2

(2) 弥生時代後期の遺物(第7図、21)

弥生時代中期以降の遺物について以下時代順に記述する。なお、出土遺構、出土層位の記述がないものは全て埋め戻し土内から出土したことを示す。

21は、高杯の杯部である。口径15.6㎝、残存高40㎝を測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は、赤褐色を呈する。時期は畿内第Ⅴ様式期もしくはその直前と考えられる。

(3) 古墳時代の遺物(第7図、22～24)

22は、土師器杯である。口径14.5㎝、残存高3.2㎝を測る。磨滅が著しいが、一部にハケメ調整痕が認められる。胎土は密で焼成は良好である。色調は内外面ともに明赤褐色を呈する。

23は土師器高杯の脚部である。底径11.2㎝で残存高は6.7㎝を測る。内外面にハケメ調整痕が残存している胎土は密で焼成は良好である。色調は全体的に明赤褐色を呈する。

24は、製塩土器である。型式は丸底Ⅰ式と考えられる。口径4.3㎝で残存高は5.4㎝を測る。粘土紐のマキアゲによって成形の後、内面には貝殻条痕文による調整を施す。外面には掌文が顕著に残り、3段の粘土紐接合痕が認められる。胎土は密で焼成は良好である。色調は、外面が明黄褐色を呈し内面は明灰白色を呈する。時期は5世紀末から6世紀中頃と考えられる。

（4）奈良時代の遺物（第７図、25）

25は、土師器杯である。SK－2から出土した。口径17.3㎝、残存高は5.7㎝を測る。成形はケズリを施し、その後にナデおよびミガキ調整をおこなう。ミガキは、外面上半部に横方向のものを施し、内面は放射状のミガキを施す。内面見込み部には輪花状のミガキを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調は、外面が明赤褐色で内面は明黄褐色を呈する。時期は、7世紀前半のうちでも後葉（飛鳥Ⅱ併行期）と考えられる。

（5）平安時代の遺物（第７図、26・27）

26は、黒色土器Ａ類（内黒）の底部である。椀の底部と考えられる。底径6.9㎝で残存高は1.9㎝を測る。胎土は密で、焼成は良好である。調整は、全体的にナデ調整を施している。内面は磨滅しており、ミガキは認められない。色調は、外面が明赤褐色で内面は暗灰黒色を呈する。

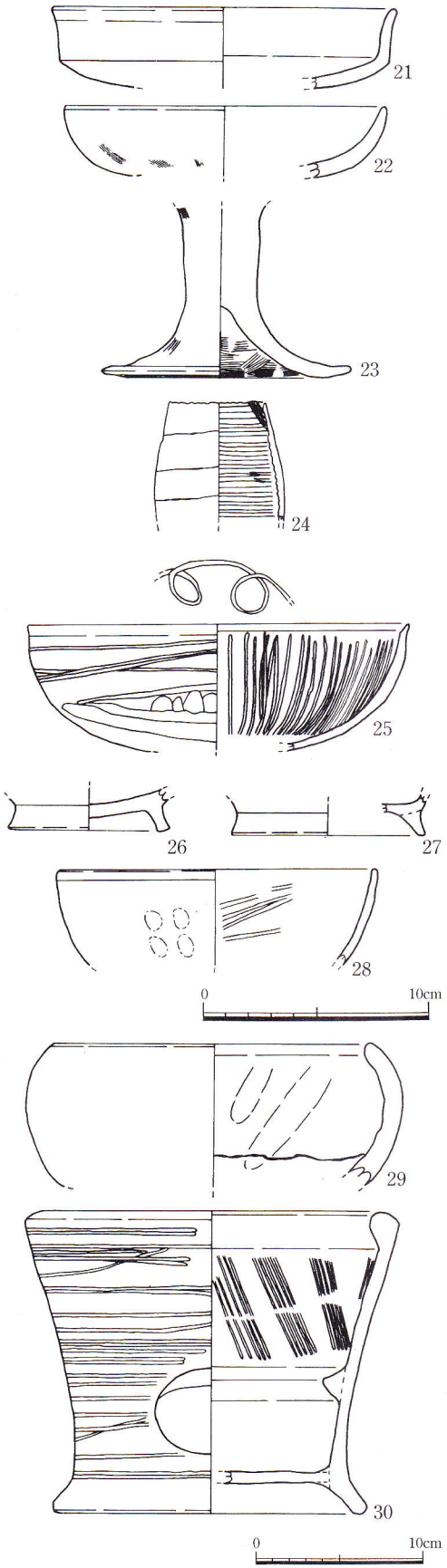
27は、土師器の高台部分である。底径8.8㎝、残存高は0.9㎝を測る。調整は底部内面以外にヨコナデを施す。底部内面はわずかに残存しているが、それには不定方向のナデを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調は、内外面ともに明赤褐色を呈する。

（6）鎌倉時代の遺物（第７図、28）

28は、瓦器椀である。口径14.2㎝、残存高は4.4㎝を測る。成形は、外面に2段のユビオサエ痕がある。調整は、口縁端部にナデを施す。内面にはわずかにミガキ痕が残存している。その他の部位にも本来ミガキを施していたと考えられるが、磨滅が著しく不明である。胎土は密で、焼成は良好である。色調は、外面が暗灰黒色を呈し、内面は明灰黒色を呈する。

（7）室町時代の遺物（第７図、29・30）

29は、瓦質土器の鉢である。口径19.0㎝、最大径22.8㎝で残存高は8.7㎝を測る。外面にはナデ調整の後に横方向のミガキ調整を施し、内面は縦方向のユビナデによる調整を施す。最大径部よりやや下方の内面には粘土紐の



第７図　遺物実測図３

継ぎ目痕が残っている。胎土は密で焼成は良好である。色調は外面が暗灰黒色を呈し非常に光沢を持つ。また内面は暗灰色を呈する。

30は瓦質土器の風炉である。底径19.0㎝で残存高は12.4㎝を測る。同一個体と考えられる口縁端部片が出土しており、直接の接合はしなかったが、口径を測り図上で復元した。よって復元口径は、10.2㎝であり、復元高は18.2㎝になる。外面にはナデ調整の後に横方向のミガキ調整を施す。内面はナデ調整で、少なくとも5カ所に5条を1単位とする櫛目文が認められる。口縁端部には強いヨコナデを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調は、外面が暗灰黒色を呈し、内面は火を受けており、明黄灰色を呈する。

【参考文献】
寺沢薫・森岡秀人『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社　1989
広瀬和雄「近畿地方における土器製塩 ―大阪湾周辺を中心として―」『考古学ジャーナル』第298号　1988

5．まとめ

今回の調査では、過去の調査成果を再評価・再確認するとともに、未調査区においては新たなる遺構を検出することもできた。これら検出した遺構群からの出土遺物や、遺構の重複関係から遺構掘削の前後関係を次のように復元することができる。

SK－5→SK－4・SK－3（弥生時代中期）→SD－1→P－1およびSK－2・SK－1（近世）

このうちSK－1からは近世の平瓦類、SK－3から弥生時代中期の遺物群が出土している。このSK－3からの一括出土遺物は、畿内Ⅱ様式の古段階に位置づけられるものであり、太田・黒田遺跡の集落形成時における土器構成を考えるうえでの新たな資料を提供することができた。

また、その他の出土遺物をみても、古墳時代の土師器高杯や製塩土器、奈良時代の土師器杯、平安時代の黒色土器、鎌倉時代の瓦器椀、室町時代の瓦質土器など、各時代における良好な資料を得ることができた。とくに奈良時代の土師器杯は、近世の遺構内から混入というかたちで出土したものではあるが、当時の中央地域から出土する同型式の土師器杯と比較しても全く遜色のないものであり、中央からもたらされた器と考えることもできる。過去には太田・黒田遺跡で白鳳期と考えられる軒丸瓦の出土が知られていることから、この土師器杯も古代寺院に関連した遺物である可能性もある。また、中世の遺物としては瓦質土器の鉢や風炉が注目に値する。1995年に行われた太田・黒田遺跡第26次発掘調査では、中世の大溝内から火縄銃に用いられたと考えられる鉛製の鉄砲玉などが出土しており、太田城との関連性も考えられていることから、今回出土した瓦質土器の鉢や風炉もこれに関連する遺物である可能性も考えられる。

【参考文献】
森浩一・白石太一郎「南近畿における前・中期弥生式土器の一様相」『考古学ジャーナル』33　1969
『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1995
『太田・黒田遺跡第33・34次発掘調査概報』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1996
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報4－平成6（1994）年度－』財団法人和歌山市文化体育振興事業団　1997

報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはっくつちょうさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成8年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	木建正宏・井馬好英
編集機関	財団法人　和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640　和歌山県和歌山市西汀丁29　TEL　0734−35−1195
調査主体	和歌山市教育委員会
所在地	〒640　和歌山県和歌山市七番丁23　TEL　0734−32−0001
発行年月日	西暦　1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わかやま 和歌山 じょうせき 城跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 さんばんちょう 三番丁	3020150	379	34° 13' 32"	135° 10' 47"	19961204 19961219	81	医院 建築

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおた　くろだ 太田・黒田 いせき 遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 おおた 太田	3020150	327	34° 13' 44"	135° 11' 54"	19970217 19970311	60	個人 住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和歌山城跡	城館跡	江戸時代	雨落溝、土坑、ピット、石列	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、土師器、瀬戸美濃陶器、茶器	武家屋敷跡
所収遺跡名	**種別**	**主な時代**	**主な遺構**	**主な遺物**	**特記事項**
太田・黒田遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代 室町時代	溝、土坑、ピット	弥生土器、土師器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、石庖丁	畿内Ⅱ様式土器一群

図　　版

第１遺構面全景（北半部・東から）

第１遺構面全景（南半部・西から）

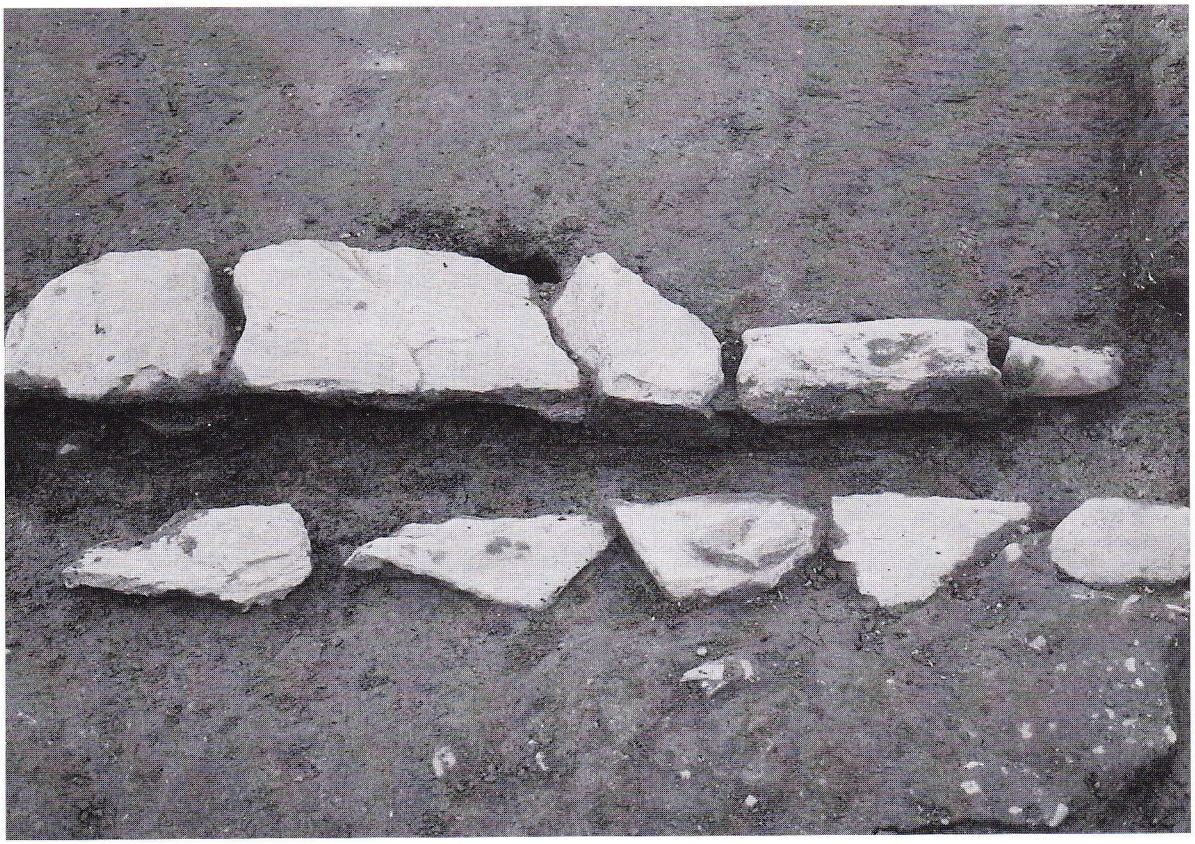
第2遺構面全景（北から）

東壁土層堆積状況（西から）

ＳＤ－２　検出状況（西から）

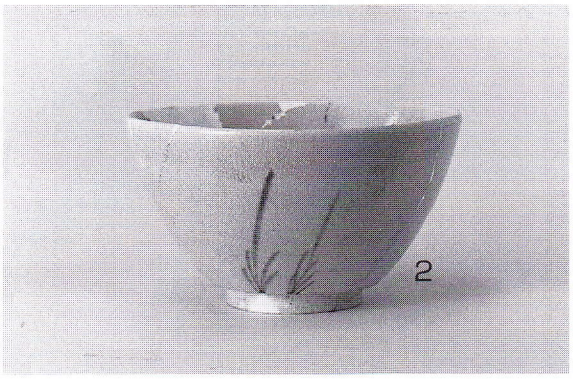
ＳＸ－５（西から）

ＳＤ－４　検出状況（西から）

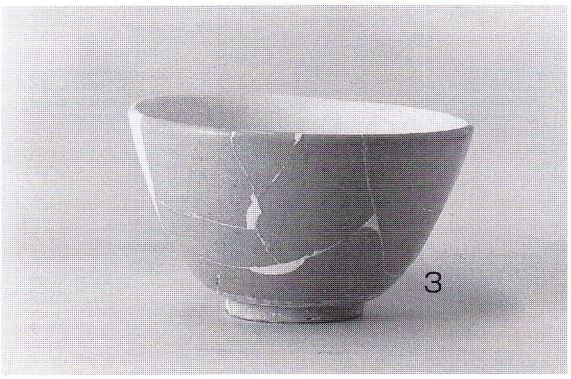


ＳＤ－４　完掘状況（西から）

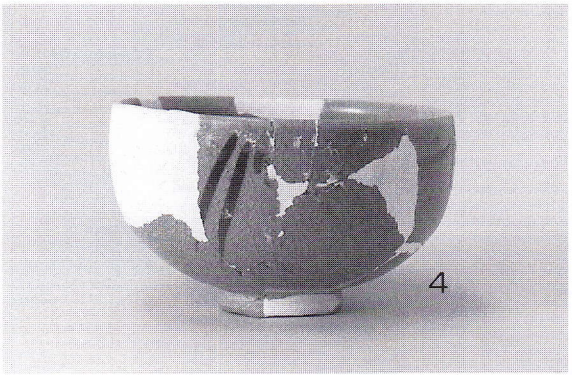
1　陶器碗



2　陶器碗



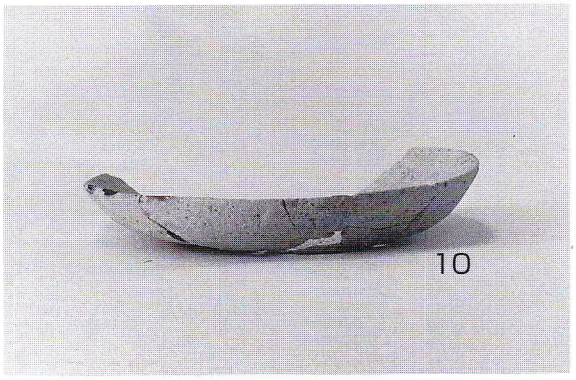
3　陶器碗



4　陶器碗

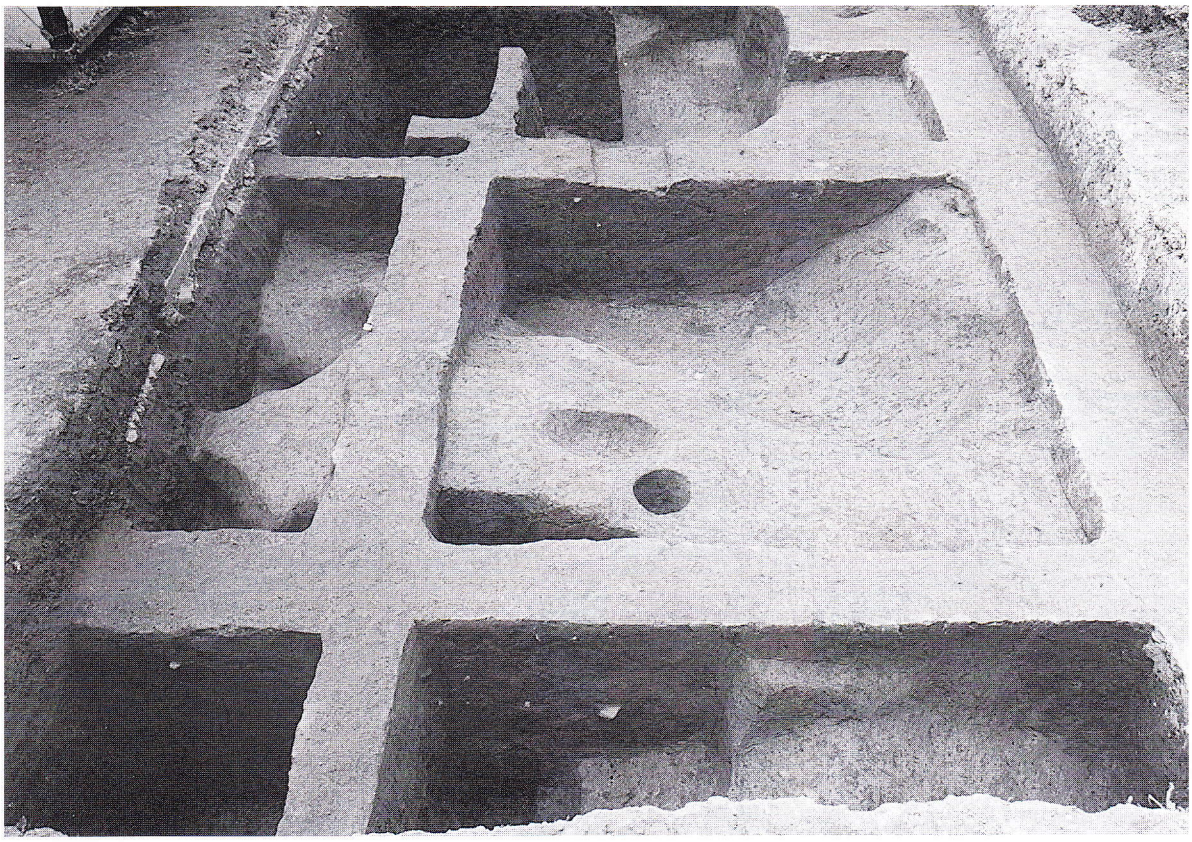
7　鉄釉碗

9　白磁底部



10　土師器灯明皿

11　ホウラク



埋土処理状況（東から）

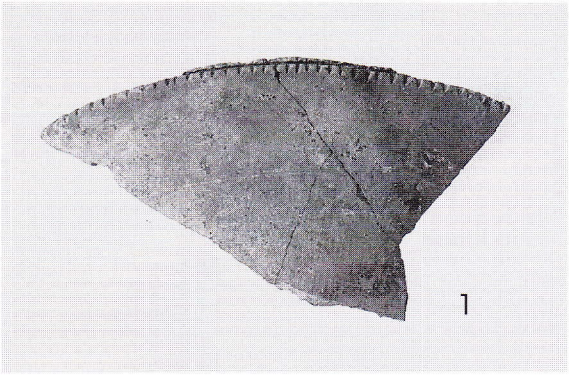
埋土処理状況（南から）

全景（東から）

全景（南から）

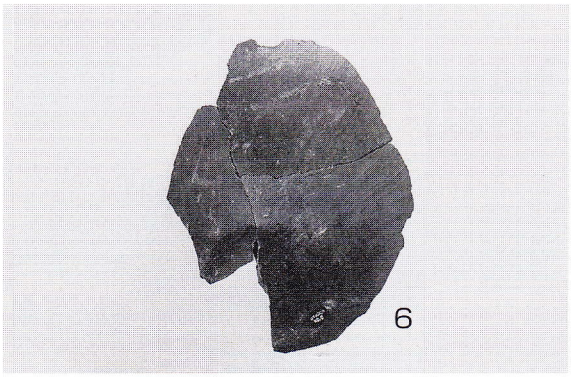
ＳＫ－２（上が南）

ＳＫ－２土層堆積状況（南から）

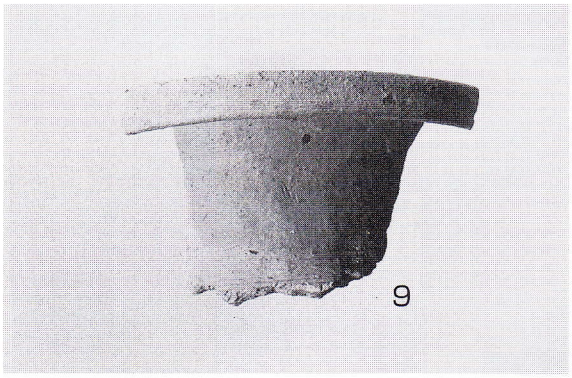


1　弥生土器　壺

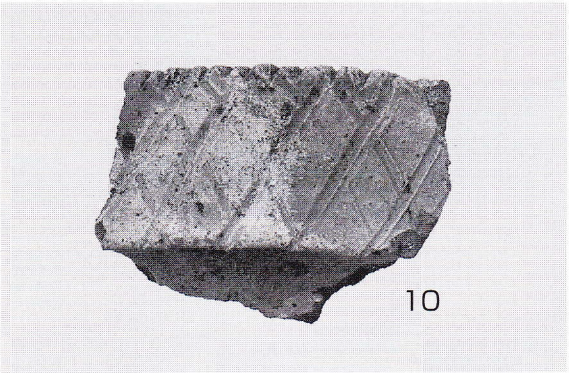
2　弥生土器　甕



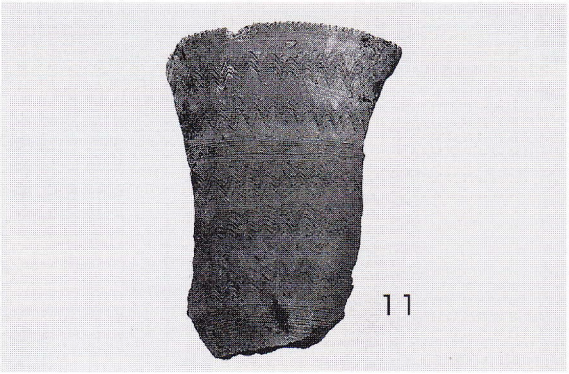
6　弥生土器　壺



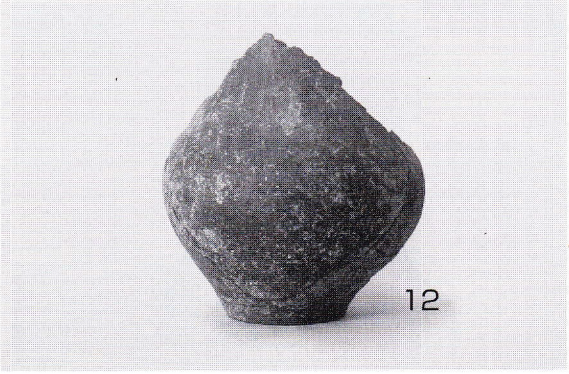
9　弥生土器　壺



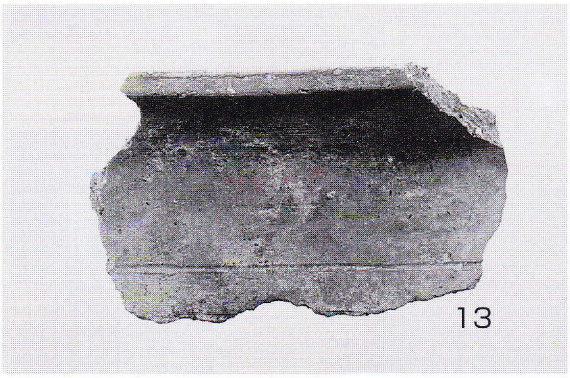
10　弥生土器　壺



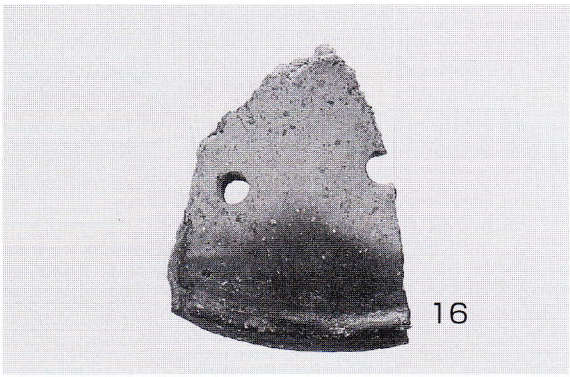
11　弥生土器　壺



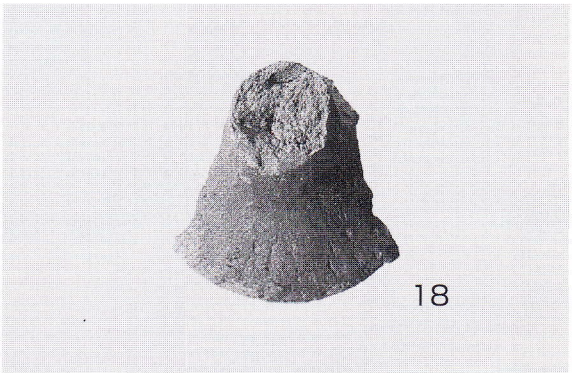
12　弥生土器　壺



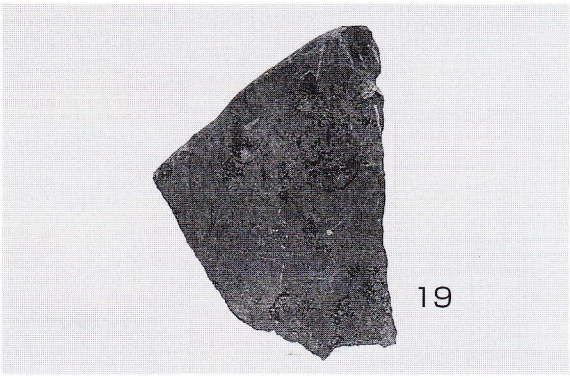
13　弥生土器　甕



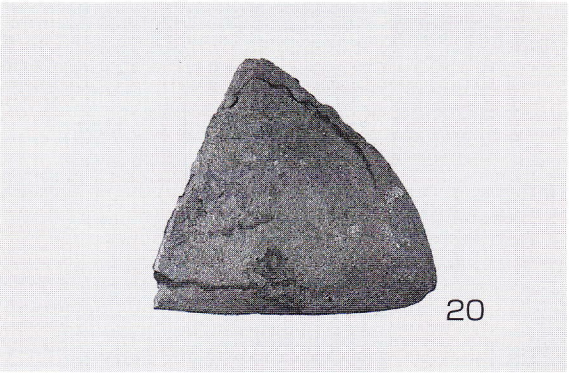
16　弥生土器　高杯



18　弥生土器　ミニチュア蓋

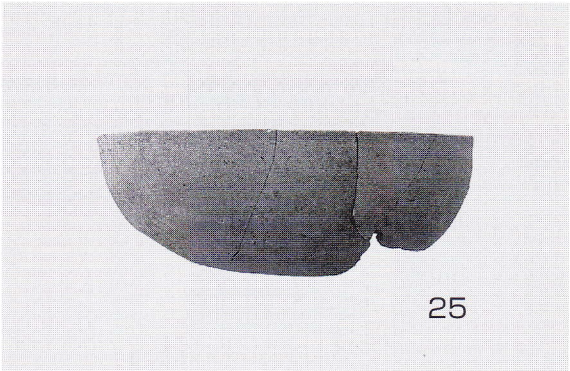


19　石庖丁

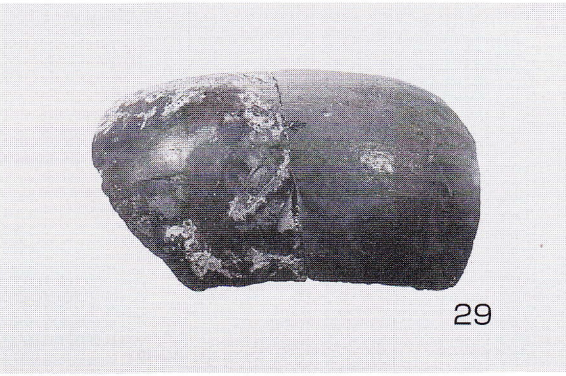


20　石庖丁

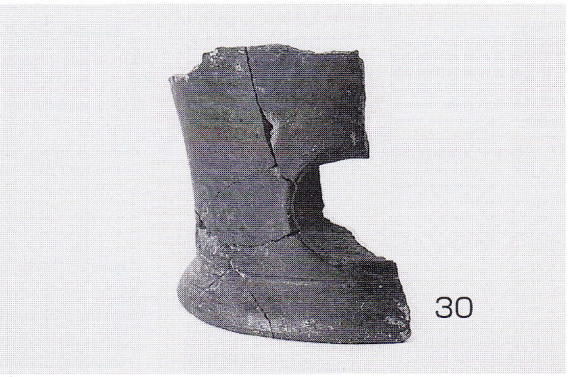
23　土師器　高杯



25　土師器　杯



29　瓦質土器　鉢



30　瓦質土器　風炉

平成9年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成8年度 —

編　集　(財)和歌山市文化体育振興事業団
和歌山市西汀丁29

発　行　和歌山市教育委員会
和歌山市七番丁23

印　刷　株式会社　高木プリント

© 和歌山市教育委員会　1997